

樋口一葉「十三夜」試考

— 坪内逍遙「妹と背かゞみ」への抗い —

塚本章子

はじめに

「十三夜」の主人公お関は、かつては、理不尽な夫に虐げられる不幸な嫁として同情されてきた。ところがそのお関が、ある時期から急に、非常に厳しい批判にさらされることになった。その口火を切ったのは、前田愛氏¹の次のような指摘である。

お関の父齋藤主計の論理によれば、お関夫婦の不和は身分違いによる考え方の相違にその原因があった。たしかに夫の話し相手にもなりかねるお関の教養の貧しさは、夫の冷遇を招きよせるきっかけにちがひなかった。しかし夫の原田勇が「名のみ立派」のつまらぬ男であったとはいえ、お関の不幸は彼女自身の自主性の乏しき、人間的自覚の欠如にも根ざしている。お関のほんとうの不幸は、それが夫の側の問題として意識され、彼女の側の問題としてまったく反省されていないところにあるわけであった。

その後、様々にお関批判が展開される。いくつかあげて見れば、木谷喜美枝氏²は、お関の「外責的性格、自省心のなさ」を指摘する。ま

た滝藤満義氏³は、「お関の主体性のなさ、それはもはや暗愚（傍点原文）と呼んでさしつかえないものではなかるうか。」とまで言う。そして、水野泰子氏⁴は、「お関に欠けているものは、自主性や人間的自覚以前に、現実を直視して考え、学習する姿勢である。」、お関は「夫のいる場所まで上つて行こうとする発想にまでたどり着けない。」と厳しい。興味深いのは、水野氏が、「原田が本当にお関をうとんじていたならば、どんな理由をつけてでも実家に追い帰し、自分の教養と今日の地位にふさわしい女性を改めてめとることなど雑作もなかったはずなのに、七年もの長きにわたって、悪態をつきながらも彼女を手放さなかった真意を考えてみるべきなのではないか。」というように、原田の立場を推測すればするほど、お関の分が悪くなっていくことである。戸松泉氏⁵も、冒頭では「その意味では、この小説は、お関の立場、お関の意識に寄りそって読まれることを基本的に要請しているところがある。」と述べつつも、齋藤家でのお関や両親の言葉を頼りに、原田の「開明主義的な価値観」を浮かび上がらせた後では、「いずれにしろ『十三夜』の文脈の中でお関の妻としての在り様を捉

える時には、お関の『不運』を招いた要因はお関自身の中にもあったことがわかる。」と屈折を余儀なくされているのである。また狩野啓子氏は、原田勇に森有礼のイメージを重ねながら、「近代人原田勇の孤独」を強調している。

現在の目で見れば、お関は「暗愚」であるかもしれず、原田の「開明主義的な」要求に自と肩入れしたくもなる。しかしテキストが書かれた時代のなかで、なぜお関のような女性があえて描き出されねばならなかったのかということをも、もう一度問い直してみたい。

「十三夜」（明二八・一二）というテキストが、同時代の多くのテキストとの影響関係にあることは、これまでも指摘されてきた。森鷗外が『めさまし草』¹⁷で、坪内逍遙の「細君」（明二二・一）との類似を指摘し、前田愛氏もその指摘を妥当としている。たしかに、車から降りて家へ入っていく導入部や、娘を迎え入れる父親のせわしない言葉と、離縁を言い出そうとしつつ言い出せない娘の葛藤など、「細君」の第二章と「十三夜」（上）との類似は決して見過ごせないのである。伊狩章氏は、「細君」に加えて、尾崎紅葉の「二人女房」（明二四・八〜二五・一二）、北田薄氷の「鬼千疋」（明二八・五）の影響も指摘する。「鬼千疋」は、実家が貧しく教育もない女性が主人公であり、「十三夜」のお関の境遇に近い。また出原隆俊氏は、武田仰天子の「虫どころ」（明二五・九〜一二）をあげる。

しかしこれらのテキストは、「十三夜」のお関の抱える苦悩のより具体的な本質、つまり、単に嫁いだ女の不幸というのではなく、貧しい家の女性が高級官僚と身分違いの結婚をしたために、「教育がない」ことを理由に夫に罵られ疎まれるという問題には、あまり深く絡

んでこない。確かに「細君」と「鬼千疋」では、「教育」が何らかの形で描かれてはいる。だが、「細君」の「夫人」は、師範学校出という高学歴の女書生であり、「生意気」と非難されても蔑まれはしない。そしてこの夫婦の不和の原因は、夫の女性関係におかれている。一方「鬼千疋」では、お秋をいじめ殺すのは「学問好き」の富子という小姑である。だがここで前面に押し出されるのは、「教育」の落差というよりも、嫁に対する小姑・姑の虐待の問題である。そして、夫は不自然なほどに関与してこないのである。

本稿では、「十三夜」のより深部に関わるテキストとして、「細君」と同じ逍遙の「妹と背かゞみ」（明一八・一二〜一九・九）を対置してみたい。「妹と背かゞみ」は、「十三夜」を原田の側から描くとすれば、かくもなるうかと感じさせるテキストである。この二つのテキストは、一つの問題をめぐって対極的な位置を示し合うのである。

一

「十三夜」が、「妹と背かゞみ」の影響を受けていることが感じられる点について述べていきたい。まず、先に少し述べたようにお関の苦悩の根本的な原因、つまり「相談の相手にはならぬ」妻、「身分の違い」、そして「教育のない身、教育のない身と」蔑まれるといった問題は、「妹と背かゞみ」で重要な問題となっている。高級官僚の達三は、師範学校出の才媛お雪と、貧しい魚屋の娘お辻とのどちらと結婚するか迷いながら、結局お辻と結婚することになる。そして、この二人について、次のようなことが問題化されている。

達三は夢の中で、結婚について身分違いを気にするお辻に、「わたしも両親がお在の頃なら。勝手な我儘もいハれないが。今じや独立單身の身の上でハあるし。」と説得しようとする。だがそれにも関わらず、達三にとつて、母おみきのいさめは心の中に深く刻まれ、忘れられぬものとなつてゐる。同じ夢の中に母が現れ、「夫婦の品格が違ふときには。女房の心と亭主の心と。する事なす事に齟齬ふから。果ては互に気まづくなつて。相談したい事もいハないでおく。(略)それがもつとで離縁さわぎ。」(傍線等は私に付す。以下同様。)と、諭すのである。語り手も、「若し一旦の痴情に迷ひて。無智恍惚子を娶りたらんにハ。後の日の失望果たしていかに。(略)相談の敵手にもならず。」と容赦ない。そして実際に達三は、結婚後、お辻との些細な行き違いが重なつていくうちに、「学問もなし。道理も知らねば。」「学識なく教育なき辻が如き者を娶りたるは。実に一生の誤りにて。」と、次第に苛立ちをのらせていくことになる。このような問題は、「十三夜」に共通する。

次に、「十三夜」の原田とお関の人物造形に役立ったと見られる点を、類似する表現を出来るだけ並置させながら指摘していく。まず原田であるが、高級官僚という地位にあること、またお関の両親の断りに、「何の舅姑のやかましいが有るでは無し、我が欲しくて我が貰ふに身分も何も言ふ事はない」と答えたように、両親がなく、そのため身分という規制を踏み越えてしまうことなどは、達三と一致する。お関の人物造形は、基本的にはお辻の位置を取つてゐる。しかしその内実は、お辻よりもむしろ達三の母おみきに近い。お関の苦惱を吐露する言葉には、夫との身分違いに悩んだおみきの姿が取り入れられ

てゐる。(番号を付して対応を示す。波線は、おみきの言葉に対してお関の言葉が夫を強く責める言葉に変化していることを示すが、このことについては三で述べる。)おみきは次のように描かれる。

翌年男児をさへに産けしかど。妹背の中睦じからず1。(略)其性質ハ賤卑ならねど。元が足輕の女なるゆゑ。する事いふ事が下品にして2。琴胡弓などの遊芸は更なり。茶の湯香花ハいふに及ばず。すべて上品なる事としいへバ。絶えて学び得たる事とてもなく3。(略)性来移り気なる吉三郎ハ。漸々におみきを疎みつ。

終日ものいはぬ日もありけり4。おみきハ此頃より夫の様子の。次第に變はりゆくを不審に思へど。はじめハ何故とも察りかねしが5。元来おろかならぬ性質なれば。あれやこれやと洩聞きつゝ、扱ハと其心を察するものから。一向おのが身の生立をバ。今更に空しくうち慄むのみ6。さりとして如何にとも詮方なれば。只なるべくだけ言葉遣ひ。また起居などに心づけて。夫の機嫌を迎ふるをバ。其本願とハなしけれども。兎角に夫の心ハ直らず。夫婦といふハ名ばかりなる。妹背の中らひのむつかしさに。辛気辛気の物思ひ。陽部ハあくまでうつくしき絹布ぐるみの紋附の。袖にもあまる憂涙7。乳房を含むおさな子の。顔にかゝりて泣出す。其おさなごの哭声に。我なき声を消おされて。しばしハ憂を忘れけん。実に世の事のさまぐなる。幸も不幸もなかくに。外面にハ見えぬものぞかし8。

お関は、両親に次のような言葉を吐露する。

・朝飯あがる時から小言は絶えず、召使の前にて散々と私が身の不器用不作法を2御並べなされ、(略)御同僚の奥様がたの様に

花のお茶の、歌の画のと習ひ立てた事もなければ其御話しの御相手は出来ませぬけれど3、出来ずは人知れず習はせて下さつても済むべき筈、何も表向き実家の悪いを6風聴なされて、(略)

嫁入つて丁度半年ばかりの間は関や関やと下へも置かぬやうにして下さつたけれど、あの子が出来てからと言ふ物は丸で御人が變りまして1、思ひ出しても恐ろしい御座ります、私はくら暗の谷へ突落されたやうに暖かい日の影といふを見た事が御座りませぬ、はじめの中は何か串談に態とらしく邪慳に遊ばすのと思ひて居りましたけれど、全くは私に御飽きなされたので5、

・一年三百六十五日物いふ事も無く4、

おみきもお関とともに、身分違いの結婚をした。彼女たちは、上品な身の振る舞いもできず、遊芸やお茶お花のたしなみもない。そして、男児をもうけながらも、夫の心が離れ、口もきいてもらえなくなつて

いる。
このおみきを描いた部分と対応している箇所が、まだ他にもある。お関の身なりは、「大丸鬻に金輪の根を巻きて黒縮緬の羽織何の惜しげもなく、我が娘ながらもいつしか調ふ奥様風?、」と父親の目に映る。そして、父親は「やかましくもあらう六づかしくもあるう夫を機嫌の好い様にとゝのへて行くが妻の役、表面には見えねど世間の奥様といふ人達の何れも面白くをかしき中ばかりは有るまじ8、」という言葉でお関を説得しようとするのである。

さらにお関には、もう一人の女性の姿も重ねられている。「妹と背かゞみ」では、達三がお辻を娶つたため、田沼へ嫁いだお雪の様子は、達三が「蒲焼屋」で隣り合わせた見知らぬ下女たちの噂話によって、

次のように伝えられる。「何でもお嬢さんの頃情郎があつたのを。無理に引割いて嫁入らしたのじゃないかと……さうかもしれないで。始終何となく鬱閉いでいてネ。芝居へゆくのもいや。花見もいやだト。内で仕事ばかりしてゐるさうさ。」。「十三夜」のお関は、「夢の様な恋なるを、思ひ切つて仕舞へ、あきらめて仕舞うと心を定めて、今の原田へ嫁入りの事には成つたれど、其際までも涙がこぼれて忘れかねた人」と言うほど、録之助に心を残して原田に嫁いだ。お関は原田に對して、「何うでも御詞に異背せず唯々と御小言を聞いて居りますれば、」と、形ばかりの妻を演じているだけである。お関には、愛していた人に嫁げなかつたお雪の失望も重ねられているのである。

また「妹と背かゞみ」では、たびたび、夫との感情のもつれが、お辻が衣類を揃えるという行為を通して表現されている。一例を挙げよう。

二三日引続けたの夜行ハ。あるいハ兼々の推察通り。余所に寒のきたるにハあらずや。さりとして夜遊びも男のはたらき。決して嫉妬などハせぬけれども……あまりといへばツンケンく。氣をきかして羽織をだせバ。何が氣に入ぬか可怖兒附……。何かにつけて不機嫌なのハ……今宵の素振りなどハまことに変なり。

これも、お関の訴えの中に、似た箇所を見つけることが出来る。
・よしや良人が芸者狂ひなさらうとも、困い者して御置きなさらうとも其様な事に愠氣する私でもなく、(略)彼れほど働きのある御方なり、男の身のそれ位はありうちと他処行には衣類にも氣をつけて氣に逆らはぬやう心がけて居りまするに、

・五日六日と家を明けるは平常の事、左のみ珍らしいとは思ひませ

ぬけれど、実際に召物の揃へかたが悪いとて如何ほど詫びても聞入
れがなく、其品をは脱いで擲きつけて、

二つのテクストのプロットの大枠も類似している。先にも少し述べたが、「妹と背かゞみ」の達三は、お雪とお辻のどちらと結婚するか迷い、お雪との行き違いからお辻と結婚する。しかしお辻との間に、埋められぬ溝を感じた達三は、離縁を迷いはじめた。そして達三は、噂話から、田沼に嫁いだお雪が実は自分を愛していたことを知って、二人の理想的だったかもしれない結婚が浮かび上がってくる。「十三夜」のお関も、結婚生活に耐えきれず、離縁を求めて実家に戻る。だが父の承諾を得られず婚家に戻る途中、お関は録之助に再会し、あつたかもしれないもう一つの結婚が浮かび上がることになる。このように対比してみれば、二つのテクストが、実際にした結婚の不幸が描かれる中で、可能性としてあつたもう一つの結婚が浮かび上がってくるという構成においても共通していることが分かる。

小稿ではこれに加えて、もう一つ、尾崎紅葉の「口惜きもの」（明二二・四）との類似も指摘しておきたい。「妹と背かゞみ」は、高級官僚の夫達三を中心とした。しかし「十三夜」は、それを、「教育のない」女性を中心に描き直している。婚家への帰り道、お関が録之助に出会わねばならないのも、この枠組みゆえである。ここでさらにあげてみたいのが「口惜きもの」である。「われ」は、春の陽気に誘われて散歩に出かける。「上野の広小路」を歩むうち、「一人乗の黒塗」の車が走ってくる。乗っている美女は「思はず笑み」、顔を赤らめる。車が通り過ぎた後、「われ」はその女性が、「我十歳ばかりの折、「寺子屋で「心易くなり」、「朋輩」たちに「相合傘に二人の名

を楽書され」た少女であり、自分の家が引つ越したために疎遠になつてしまった少女であることに気付く。「高等な奥様」となつたらしいその女性を、「邪慳ものにもし連添ふたらば、一生の不幸、そればかりが心元なし。」と案じながら、「われ」は「口惜やあれほどの幼稚馴染、もしわれ添ふならば、どれほどか可愛がるべきに……」と後悔の膺をかむ。

お関と録之助が出会うのも、同じく「上野」の「広小路」である。お関と煙草屋の息子録之助とは、「高坂の録さんが子供であつたころ、学校の行返りに寄つては巻煙草のこぼれを貰ふて、生意氣らう吸立てた」という、同じ学校に通う幼なじみだった。そして斎藤家は引越して、今のお関は録之助の様子を聞くこともできない。「口惜きもの」を変形し、晩秋の月夜、奥様お関の乗つた車を、彼女を忘れられずに身を滅ぼした録之助に引かせたのが、「十三夜」のお関と録之助の出会いではないだろうか。

少し要約してみる。「十三夜」は、逍遙の「細君」の場面設定、薄氷の「鬼千疋」のお秋等の境遇を借りつつ、より根源的には逍遙の「妹と背かゞみ」を描き直しながら書かれていった。さらに、紅葉の「口惜きもの」も手懸かりにして出来上がっていったのである。¹²⁾

二一

以上のように、「十三夜」と「妹と背かゞみ」とを対置してみれば、「十三夜」の原田とお関という夫婦は、「妹と背かゞみ」の達三とお辻という夫婦の変奏として浮かび上がってくる。もう少し、この間の

事情を追ってみる。

達三が身分の違う「教育のない」お辻を娶る決心をしたのは、ロー・リットンの「マルトラバース」⁽¹³⁾を読んだことがきっかけであった。そこには、「其真情の切なること争でかまたアリス女に劣らん。よしや学識が乏しければとて。教へ導きなば人並にハなるべし。アリス女の稚蒙なる。神といふ事だに解せざりしを。『マルトラバース』ハ教へ導き。竟に一佳人となしたるならずや。」と書かれていた。しかし、達三は結局お辻との「身分の差」を埋めることができなかった。達三はそこに耐え切れぬ苛立ちをおぼえているのである。

一方「十三夜」においても、お関の母の言葉によれば、原田もまた、「何も舅姑のやかましいが有るでは無し、我が欲しくて我が貰ふに身分も何も言ふ事はない、稽古は引き取つてからでも充分させられるから其心配も要らぬ事、」と、「支度」まで調べてお関を正式な妻として娶っている。高級官僚の原田には、いくらでも自分の出世に有利な結婚が出来たことを考慮すれば、原田もまた、「恋情」によって「身分の違い」を越えることが出来ると考えていた一人だった。そして今は、「相談の相手にはならぬ」妻にいらだち続けている。「十三夜」は「妹と背かゞみ」と同様、「恋情」によって身分差を越えることが出来ると信じた啓蒙知識人の結婚の失敗、悲劇として見ることも出来る。

しかし「十三夜」というテキストは、この「妹と背かゞみ」を反転させ、原田の言い分を封じ込めながら、また彼をいささか軽薄で強引な人物に感じさせながら、お関の側から描かれているのである。そこには、「妹と背かゞみ」に対する何らかの問題の書き換えや反駁があ

ったのではないか。ここまで、影響関係や類似を論じてきたが、この反駁という面にこそ「十三夜」の独自性を見るべきであろう。

高級官僚の夫の側から描かれた「妹と背かゞみ」を、逆に「教育のない」妻の側から描き直すということには、一体どのような意味合いがあったのだろうか。それぞれのテキストが発表された時期の、女子教育をめぐる言説との関係にも目を向けながら考察する。

「妹と背かゞみ」では、お辻と達三がすれ違っていく様はリアルに描かれている。しかし、お辻の焦りや苦しきは、共感し得るものとしては捉えられていない。「お辻の目に見えぬハ笑止笑止。後に思へバこれも絶縁の卵ぞかし。」というように、その愚かさや里の悪さが強調されている。最後の場面では、達三が離縁を宣告してお辻は自殺するのだが、その死さえもが冷ややかに受け取られている。

現に心狭き輩にありてハ。さしも患ふべき事ならぬを痛くも患ふべき事の如く思ひ。(略)フラ／＼と逆上して。みづから死を急ぐも尠からず殊に年若き女子にして。絶えて学識なき輩にありてハ。兎角に感情の奴となりて。たちまち逆上する事共多し。

(略) 憫れむべし我がお辻は。もとより学文の薰陶もなく。更に追い打ちをかけるように、お辻の死んだ淵の前で、「学識」あるお雪が、「ナアニ何様な悲しい事があらうと。私は自分の手で死ぬのなんのと。そんな卑劣な事……為はしないがネ。」と言いつつ。お辻は最後まで愚かな者、救いぬ者として突き放されたまま、死という結末によって達三との関係を完全に断たれていくのである。

一方お雪は、「蒲焼屋」での噂話の中で、自分の肩を持つ夫に姑を立てておくことが「道」であると順々に説き聞かせ、姑とのめめ事を

解消したという、「ステキに理屈っぽい嫁御」と噂される。その噂話を耳にした達三は、お雪が実は自分を慕っていた事を知って、「嗚呼我ながら愚なりき」と後悔する。「道」をわかまえ、「理」をもって対処する「才色兼備」のお雪との、あつたかもしれない結婚は、お辻との結婚とは対照的に、どちらも高い教養を持ち、「敬慕」し合い「相談」し合える理想の夫婦像として浮かび上がる。

このテキストでは、はじめから達三の選択は間違つたものとされている。お辻にひかれていく達三を諷める言葉は何度も繰り返されるが、そこに見られるのは、「痴情」・「猷欲」・「情欲」といったものへの蔑視である。「夫れ敬慕する所なうして。たゞ徒に相思ふ者ハ。所謂猷欲に溺るゝものなり。所謂眞の愛にあらざるぞかし。尋常の猷欲と眞の愛情との異なる所ハ。敬慕というものゝ有無にあるなり。」などの言葉の背景には、身分の違う無学なお辻との結婚を否定し、身分の釣り合う、高い教養を持つお雪との結婚を肯定しようとする意図がこめられている。そこには、

家庭教育の重んずべきハ。今改めていふまでもなし。母たる其人を選ばざらめやハ。然るに世の人の軽躁なる。只管目前の情欲を主として。後の幸不幸を思ひも図らず。色に溺れて娶り。欲にくらみて嫁ぐ。(略)妻は下婢の如くならずバ。必ず色を売る娼婦にも似たり。(略)後の少年若し其配を求めんとせば。才識双つながら我より優れる。女子を選求めて妻とすべし。

という意識が、語りの中に底通している。

「妹と背かゞみ」を支配しているこういった価値観は、逍遙自身の価値観のみならず、当時の欧化主義的な女子教育の高まりを背景にし

てもいる。『女学雑誌』第一号から第五号(明一八・七〇九)まで、三回に分けて連載された「婦人の地位」では、まず「人世の開化」を「野蠻の時代」・「半開の時代」・「開化の時代」と三段階に分け、それぞれを「色の時代」・「痴の時代」・「愛の時代」と言い換え、現在を「痴情の時代」から「愛の時代」への過渡期と位置付けている。そして「愛の時代」において、「眞の愛」が行われるためには、男女同権論は退けた上で、これまで「男子の下婢」であつた「婦女」を、「男子の助け手相談相手」にまでと限定して、「改良」すべきであると説いている。

また『女学雑誌』六号・七号(明一八・一〇)には、明治女学校での講話記録「イーストレーキ婦人の演説」が載せられている。そこには、
行為活発にして心智逞ましき男子ハ自己の才智を感じ自己の行為を認むる能ハざるの婦人に対して親愛の情を有し同等の伴侶となる能ハざるべし教育ハ人生に品格を与ふる者なり教育ハ各自互いに尊敬せしめ又他人の尊敬を得べき者なり人の妻たる者母たる者姉妹たる者其夫其子又ハ其兄弟の良行才学を識別する力を有する時ハ其夫、子、兄弟ハ一層の奮励心を感じし又其妻、母、姉妹の才智に感じて之を尊敬するの心を起し是より婦人の位置一変して高尚の程度を保つべし此の如くなれば男女初て真成の同侶と言ふべきなり

と、「教育」のある「尊敬」し合う男女の関係が称揚される。そしてまた、「母たる婦人ハ兒子と共に自己往日の生活を新たに再見するの状ある者にて其の智識の大道に沿ひ初歩の教育を助け其学校の復習を

指揮して自己が幼年の時に習ひ得たる教科を思ひ出し新たなる感を発することあり(略) 未来の政治家の心を陶冶するは男子にあらずして婦人に在り」と、子供の学業を助け、共に学び、教育する母の重要性が説かれている。

しかしこの講話記録は同時に、「此に婦人あり美麗にして愛すべく且温順の性質を備へたる時ハ人をして之を慕ふの念を起さしむるも此婦人にして才智なからしめば人をして憐むべく且品等下劣なりとの念を発せしむべし」と述べてしまつてもいる。このように、女性の「教育」の強い奨励が、「教育のない」女性への蔑視を生み出していくことに留意しておきたい。「妹と背かゞみ」の成立した時代の背景には、このような女子教育の隆盛と、それによる「教育のない」女性への新たな抑圧の誕生があつた。

もう少し辿つておこう。明治二五年六月には、『女学雑誌』第三二〇号の「社説」に、次のような記事が載せられている。

必竟其過ちは元と学まなびざるが故なり。母は、生理学、心理学、教育学等を知らざる可らず。(略) 此学問なき女子は、たとひ縫針を好くし料理に精しとも、母たるに適せず、(略) 其子の全身全霊を殺すに比すべくもあらず。

されば、女生には、一と通りの学問を為さしめずんばある可らず。(略) 此覚悟なくして、妻となり母となるは、人を害し、世を毒し、其の一家に災ひするもの也。

「教育のない」女性への蔑視は、益々露骨に表されているのである。「教育のない」お辻との「痴情」に引きずられた結婚ではなく、高い教育を受けたお雪との「敬慕」によつて結び付く「愛」の結婚、そ

れは、日本という国家を「文明開化」し、西洋文明に追いつこうとする時代が求めた、夫婦像・家庭像の一つの新しい理想だったのである。だが達三とお雪の結婚は、結局遂げられなかつたものとして描かれる。現実には、愚かな妻に自殺され、ゴシップ記事が載せられたことによつて職をも失うであろう達三と、「生中に学問をしたのが、今じやア(略)わたしの苦の種だわ。」「わたしの悲しさを知つてる人は。日本に幾人もなからうと思ふワ。アゝあじきない身の上だワ。」というお雪の嘆きがある。この理想と現実とのギャップは、共感を呼ぶものであつたと見え、『女学雑誌』第一四四号(明二二・一)「叢話」には、「細君」と題する次のような書評が載せられている。

吾人は兼てより憫れむなり当今尤も歎き多き夫人を如何なる御方ぞと云ハゞ、即ち深く文明の学問を修め、深く文明の自由を味わい、深く文明の夫婦の交際を承知して而して此人ならばと誤まり認ためたる当世男子の許に帰ぎたるの婦人にてあるなり。

(略) 春の舍主人は此辺の意味を写さんと御謀反あるにや、巖には妹と背鏡を著はしてお雪を苦しめ

この書評の重心は、題からも明らかのように「細君」にある。そして「妹と背かゞみ」においても、お雪の立場に添つて注目にしたい。同情されるのは、教育のある女性である。そこでは、女性の高い教育を推奨し、「敬慕」によつて結び付く夫婦をめざしていこうとする意識が主力となつてゐる。その一方で、お辻のような女性への侮蔑や抑圧がはらまれていたことは、全く気付かれていない。

「妹と背かゞみ」に描かれているのは、達三・お雪という新しい教育を受けた者たちの苦悩である。そこには、尊敬し合い相談し合う西

欧型の夫婦関係がなかなか実現できぬ日本の現実へのいらだちがあった。その中で、お辻のような「教育のない」妻は抑圧されていたのである。

二二二

このように見てくると、「十三夜」がお関の側に立って、噴出する怒りや恨みの言葉を描いたことには、前述したような、貧しく「教育のない」妻への抑圧に対する反駁としての意味合いがあったように思われてくる。夫に「教育」がないと蔑まれるお関は、「妹と背カミ」のお辻とは違つて、決して愚かな娘とは描かれていない。実家において、むしろ良く出来た娘とされている。「阿関の事なれば並大底で此様な事を言ひ出しさうにもなく、」と父親は言い、母親も「お前に如才は有るまいけれど」とお関への信頼を口にする。お関自身が「御父様も御母様も私の性分は御存じ」とそれを自覚している。お関は、原田の持つ価値観とは全く違う価値観の中で育てられてきたのである。

「十三夜」は、開明的な夫に「教育のない妻」と非難される女性、どのような価値観、生活習慣の中で育ってきたかということを立て体的に捉えようとしている。「いはゞ私も福人の一人、いづれも柔順しい子供を持つて育てるに手は懸らず人には褒められる、」と、父親は世間の視線を意識し、子供が従順であることを喜んでいる。

それ故、離縁を求めめるお関に、父親は次のように諭す。「身分が釣合はねば思ふ事も自然違ふて、(略)やかましくもあらう六づかしく

もあらう夫れを機嫌の好い様にとゞのへて行くが妻の役、」、「身一つと思へば恨みも出る、何の是れが世の勤めなり、」、「一つは親の為弟の為、太郎といふ子もあるものを今日までの辛抱がなるほどならば、是れから後とて出来ぬ事はあるまじ、」。こういった父親の女大学的発想は、これまでお関自身が内面化し、自分に言い聞かせてきた言葉でもあったはずである。その発想による忍耐が、限界に達したからこそお関は飛び出してきたのだが、両親の目に映る良き娘としての自分の姿を壊すことが出来ないお関には、その発想から逃れることは出来ない。新しい教育の中に自分を作った原田と、古い生活意識と古い女大倫理を疑わない斎藤の父と娘との決定的な違いである。

今、「古い」という言葉を使った。しかし、実はこの父親の価値観は、新たな復古的女子教育と共通の基盤を持っていくものに他ならなかった。「十三夜」が発表された明治二八年一二月頃、女子教育をめぐる状況は大きく変わっていた。明治二〇年代前半から欧化主義的女子教育への反動が起ころはじめ、女大倫理的女子教育が復活してきているのである。明治二七年五月の『女学雑誌』には、「女子教育大勢一転の機」という記事が載せられ、「世間、西洋風を好む、こゝに於てか西洋風的女子教育ありき。世間、進歩主義を喜ぶ、こゝに於てか、文明風的女子教育ありき。然るに、近年此等の氣風を擯斥し、一体に古風を好むこととなりたり。」と書かれている。日清戦争を挟んで、その傾向は帝国主義の台頭と結び付き、再編成されながら、益々顕著になってきていた。例えば、すでによく知られた資料であるが、「十三夜」と同時期に出版された国分操子『日用宝鑑貴女の葉』(明二八・一二)には、「世界地球図」、「日本全図」、「教育勅語」、「皇

室」、「皇族一覽」、などの項目の後、第一章「国体及び政治の部」として「日本帝国の位置」、「国民の義務」といった項目が立てられている。そのような枠付けの中で、第四章「奉仕の部」で述べられる、「父母に事ふる心得」や「夫に事ふる心得」をはじめとする項目には、「三従の教」が強く打ち出されている。

原田と「教育のない」妻お関とのギャップの根幹にあるのは、原田の開明的な価値観と、この斎藤主計という父に象徴される、根深く残り復活してきた価値観との対立である。「妹と背かゞみ」が、お辻の愚かさ、実家の人々の下品さに収斂していったのに対して、「十三夜」はこのギャップを開示して見せたのである。「今宵限り関はなくなつて魂一つが彼の子の身を守る」というように、解決の道を全く閉ざされてしまったお関は、二つの価値観の間で翻弄されている。

そしてこの結婚に対して、帰り道での録之助との再会は、お関にあったかもしれないもう一つの結婚を浮かび上がらせる。それは、つましくとも自由で幸福な結婚のように思われてくる。「行々は彼の店の彼処へ座つて、新聞見ながら商ひするの」という言葉は、夫と共に働く、活発なお関の姿を想像させる。そして、お関の「まあ何時から此様な業して、よく其か弱い身に障りもしませぬか、」といった言葉からは、気弱で優しい夫をいたわる、しっかり者の妻の姿が想像される。お関は、「実家へ行く度に」録之助の様子を尋ねていたのであり、録之助も取り替え不可能なほどお関を愛していたのである。録之助とのあったかもしれない結婚から浮かび上がるのは、欧化主義的女子教育が説く夫婦像からも、女大学的女子教育が説く夫婦像からはずれた、自由闊達な町人、商家の夫婦像である。一葉は、そんな夫婦像を幸福

な幻影として、月夜の中に一瞬だけ浮かび上がらせる。それは、原田やお関の父がそれぞれに思い描く、淑やかな「妻」の像を、相対化してみせるものなのである。

二人の自然な形の結婚を奪ったのは、身分差を越えられるという「新しい大きな思想」を抱き、理想の夫婦像を夢見たであろう原田の、突然の、強引な求婚であった。お関は、録之助に心を残しながら原田に嫁ぐ。録之助は生きる意欲を失い、膨張し切り捨てられていく下層社会へと転落していく。ここには、小さな幸福が「新しい大きな思想」によつて壊されていくという構図がある。その意味では、自分の価値観を、有無を言わさず一方的に押しつけてきた原田は、お関の言う「鬼」であった。

「十三夜」が、原田の言い分を封じ込め、お関の側から描かれていったのは、「妹と背かゞみ」が、日本の「教育のない」女性の愚かさ、手を焼く啓蒙的知識人の苦悩の側から描かれていったのとは対照的に、その啓蒙的知識人の抱く急進的な「新しい大きな思想」の前で起こるひずみを、急激な価値観の転換の中で翻弄されるものの痛みに添つて、描き出そうとしたからかもしれない。

しかしまた、見逃してはならないのは、録之助との再会によつてよみがえった、もう一つの自由で幸福な結婚の夢は、やはり淡い夢に過ぎず、二人の別れと共に葬られてしまうことである。お関は、原田の家へと帰っていく。そしてそれを支えるのは、皮肉にも、父の論理、復活していく女大学の論理である。国家観の変動と共に、一旦は激しく揺れ動きながらも、しかしやがて強固に統合されていく、あるべき「妻」像という規範から、一人の女性が逃れ出することは、やはり容易

なことではなかつたのである。

「妹と背かゞみ」では、お辻の自殺によつて達三とお辻の関係は完全に断たれ、二人の断絶は埋めることの不可能なものとして投げ出される。しかし「十三夜」は、お関を逃避させたり、死なせたりはしなかつた。お関の生きる場所は、やはり原田の家になかなく、お関と原田は、どんなに苦しくとも再び向き合い続けねばならない。

三

「十三夜」が、「教育のない」妻の側から描き直そうとしたということ、それは妻の側の言い分、侮蔑される事の悔しさを表すために、お関の内面をどのような言葉で表現するかという問題でもあつたはずである。

「妹と背かゞみ」では、お辻の教育のなさに対する達三の憤懣の高まりは、次のような「独白」によつて表現される。

元が教育のない人間だから。仕方がない訳だと恕してもやるが。度々おだやかに教へ論して……嘯んで含めるやうにいひ聞かしてあるのに。(略) いつそ今のうちに縁を断たうか……しかし……毎々の不都合とハいふものゝ。正可に別々に離して見れば。いづれも些細な科ばかりで。離縁をする程の理由でもなし。殊に悪意あつて為た訳でなく。全く教育がたらぬからの事……教育の足らないのハ元承知で。娶……嗚呼どうしても誤りだつた……今更これ計の理由で。忽地追だすのハ過酷のやうだ。

この箇所は、例えば後の「浮雲」の文三の煩悶にも連続していくよ

うな、内面表現の先鞭の一つとして注目されてきたところである。¹¹⁷小森陽一氏は、「この時期の『独白』の基本形態」を、「言葉を発する側が、相手の不在ゆえに、自らの発話の位置を選びとれず、宙吊りにされた状態におかれたまま言葉を発しつづける。」状態と規定する。そして、日本の「『近代』文学における、『内面』の形象化、あるいは心理の表白は、いわば不決断の不安それ自体として、なにごとくも選ぶことのできない言葉の流れとして文体化するに至つたのである。」として、右の箇所を引いている。

「教育のない」妻に苛立ちつつ、しかし離縁を言い出せぬ達三の心境は、「吁、私位不仕合の人間はあるまい、御前のやうな妻を持つたのは」と嘆きつつも、自分の「口から出てゆけとは」言わぬという原田の言葉としても聞こえてくるだろう。だが、「十三夜」は原田の言葉を封殺し、直接伝えることを放棄した。そしてその上で、お関の言葉を吐露させているのである。

お関は、実家の入り口にしばらく立ちつくし、「戻らうか、戻らうか、あの鬼のやうな我良人のもとに戻らうか、(略) 多々厭や厭や」と煩悶する。それはお関の「決心」が、やはり煩悶という円環の中にあることを示す。¹¹⁸両親の前で吐露されたお関の言葉は、達三の憤懣の言葉がお辻に直接投げかけられなかつたように、やはり原田という「他者」に直接投げかけられることのない言葉である。ぶつけられるべき対象を迂回して、自分の分身に近い両親の前で吐露してしまう言葉でもある。そこでは、最終的な決断は、聞き役である父親にゆだねられている。そしてこの父親が反対するであろう事は、娘のお関には予測できたことだろう。言ってみれば、この「安定した聞き手」、

「否定項を提出する對話者」がいたからこそ、お関の言葉は、「妹と背かゞみ」の達三の「独白」のような「不決断の不安」に満ちた堂々巡りを一時免れ得た、つまり連綿と夫への不満だけを訴えられる位置を一時取り得たのである。それは、いわば変形した「独白」だった。だからこそ、父親が離縁を承諾しなかったとき、お関はあつげなく帰って行くのである。

一において対応させた際、波線で示したように、おみきを描く言葉がお関自身の発する言葉となる時、夫は「召使いの前にて散々と」妻の不作法を並べたて、妻の実家の悪さを「表向き」「風聴」する悪意に満ちた夫となる。そして妻は、おみきのように、夫の不機嫌の理由を探り当て、自分の行いを自省して言動に注意し始めるのではなく、「人知れず習はせて下さつても済むべき筈」と、夫に責任を求め、「暖かい日の影といふを見た事」がないと、不幸な現状への嘆きに没入していく妻となる。お関の言葉は、「妹と背かゞみ」に描き出される近代知識人達三の内面を表現する言葉とどこかで呼応しながら、妻の夫を責める言葉として紡ぎ出されてきたのである。

二葉亭四迷の「浮雲」、森鴎外の「舞姫」、田山花袋の「蒲団」、「近代文学」の稜線と位置付けられてきたテクスト群には、知識人男性たちの新しい「愛」への憧憬と展開の様相を見ることもできる。そこに描かれる男女関係には、一種の師弟関係が付きまといっている。彼らは、女性を教え導く。そこには、自分の理想を女性に求める、あるいは理想の女性を作り上げようとする男性たちの願望があった。そして女性たち（女学生たち）は、いずれもその願望を半ば自らのものとしつつも、結局は破綻して行くのである。だが彼女たちの悲鳴は、決

して相手の男性を「鬼」と罵倒するような言葉になって表れることはない。そして、そのもう一つ深部には、「蒲団」における時雄の細君のように、新しい男女の夢見る「愛」によって抑圧される、「温順と貞節とよりほかに何物をも有せぬ」女性の、声にならぬ声が渦巻いていたはずである。

「十三夜」は、これらの系譜のテクスト群と、密接な、しかし表裏の関係を結ぶのであり、その時、お関の夫を罵る言葉は二重に抑圧された女性の声として響くのである。

おわりに

「十三夜」は、「妹と背かゞみ」を反転する形で、お関の側に立つて描こうとした。それ故に、すなわち「妹と背かゞみ」がある故に、原田はお関の口から「鬼」と罵られるだけで直接描かれなかったのかもしれない。そのことが、現在の我々に、原田という「空白」を、当時の概念的な啓蒙的知識人像によって埋めようとさせてしまった。そしてそうすればするほど、逆に、お関の方が批判的に見られるという皮肉な読みをもたらすことにもなった。

ことに、冒頭部分にもあげたような、近來のお関への激しい批判は、新しい「愛」を夢想し、「教育」のある「賢い」女性の育成を提唱する一方で、「教育のない」女性を「愚か」と侮蔑し排除していった近代知識人男性たちの欲望に、無意識のうちに寄り添ってしまったようにも思われる。「妹と背かゞみ」を対置した時、「たしかに夫の話し相手にもなりかねるお関の教養の貧しさは、夫の冷遇を招きよせ

るきっかけにちがいがなかった。」という前田愛氏の言葉は、逍遙の側、達三の側からの言葉である。しかし、それは「十三夜」が描こうとしたものではない。お関という、「教育のない」高級官僚の妻の「ほんとうの不幸」は、原田の言い分という空白に「妹と背かゞみ」というテキストをはめ込んだときに、浮かび上がってくるのである。

〔注〕

- (1) 「十三夜の月」(『樋口一葉の世界』一九七九・一二平凡社初出「十三夜」一九六八・四『国文学』)
- (2) 「十三夜」(一九七八・五『解釈と鑑賞』)
- (3) 「人妻たちの系譜―『十三夜』論―」(一九八三・三『横浜国大國語研究』)
- (4) 「『十三夜』試論―『母』幻想の称揚―」(一九八九・九『文芸と批評』)
- (5) 「樋口一葉『十三夜』試論―お関の〈決心〉―」(一九九一・三『相模女子大学紀要』)
- (6) 「関係性の病―『十三夜』の照らし出す近代―」(一九九六・一一『日本文学』)
- (7) 「鶴翻搔」(明治二九年二月)
- (8) 前田愛(1) 前掲書
- (9) 「『十三夜』の発想」(『幸田露伴と樋口一葉』一九八三・一 教育出版センター)
- (10) 出原隆俊「『十三夜』を統合するもの―『擦れ』の機能―」(一九九五・六『解釈と鑑賞』)

(11) 「妹と背かゞみ」は、後々幾度か版を重ねている。明治十九年

一〇月には初版と同じ会心書屋が上下二冊本として再版している。明治二十二年一月には三友舎と自由閣から、明治二十六年一月には栄昌堂から出版されている。(いずれも早稲田大学演劇博物館所蔵) また明治三〇年一二月に博文館から出た『明治小説文庫』第一巻にも収められている。(立命館大学所蔵) 長期に渡って高い人気を得ていたと思われる。小稿の本文は、『明治文学全集』第一六卷(一九六九・二筑摩書房)による。

一葉の日記には、「妹と背かゞみ」を読んだという記録はない。だが、当時の逍遙の存在感、一葉がライバル視していた花圃の師が逍遙であったこと、他の雑誌と比べて『早稲田文学』へのいち早い関心の持ち方(明治二四年一〇月の創刊にたいし、二四年一月三日の日記には「『早稲田文学』をからんとて約束す」と記されている。)等から、逍遙には特別な関心があったと思われる。「十三夜」には「細君」の影響があることが明らかにされているが、先に述べた出版状況から推測しても、また後に述べる表現の類似から見ても、「妹と背かゞみ」も併せて一葉の視野に入っていたと考えてよいのではないか。

また、「妹と背かゞみ」第一七回其下で、達三がお辻に里へ戻ることを厳命する場面は、「われから」で恭助が町子に別居を言い渡す場面を彷彿とさせる。

(12) 先行研究において、上と下の噛み合わせの問題が一つの争点となってきた。上と下の間に、微妙な違和が感じられるとすれば、この様な事情の反映とも考えられる。

(13) 「マルトラバース」は、『花柳春話』（明一・一〇〜一二・

四）という、丹羽純一郎によって翻訳されたベストセラー小説の原作である。逍遙にもそれは意識されていたはずである。

(14) 「当世書生気質」第一四回には、「上の恋」を「其人の韻気の高きと、其稟性の非凡なるとを、景慕するより起れる恋」とし、「中の恋」を「まづ其色をめづる」恋とし、「下の恋」を「肉体の快楽を」主眼とする恋とする、という記述がある。

(15) 「理想之佳人」（『女学雑誌』第一〇四〜八号 明二一・六〜七）にも、「夫婦相ひ敬するの甚だ大切なることを覚悟すべし。

（略）先ず男子に向て君等婦女子を敬すべしと云ひ、婦女子に向ては君等必ずよく敬せらるべきの佳人たれと云ふべし。而して、佳人の能く敬せらるる者は、先づ之に、之を受けるの資格なかるべからず」と述べられるなど、『女学雑誌』の主要な提言に添うものと見て良い。

(16) 『女学雑誌』は、この頃芸娼妓への批判を繰り返している。

(15) であげた「理想之佳人」でも、激しい非難がされている。佐々木豊寿「積年の習慣を破るべし」（『女学雑誌』第四八・五二・五四号 明二〇・一〜三）にも、芸娼妓の排斥が訴えられている。こういった排娼運動も、同じ文脈にあると思われる。

(17) 宇佐美敷「『新磨妹と背かゞみ』の方法―作中人物の内面表現をめぐる―」（一九八六・六『国語と国文学』）、小森陽一「独白の系譜」（『文体としての物語』一九八八・四筑摩書房）等。

(18) (17) 前掲書

(19) 田中実「『十三夜』の『雨』」（一九八七・一〇『日本近代文学』）に、「彼女は実家の格子戸を自分の意志では開けられないし、開けていない。」、 「引き裂かれた苦悶のなかでお関が登場するところに、（略）この物語の発端があった」という指摘がある。

(20) 小森氏（17）は、「社会の中で他者の存在を強く意識したとき、無意識のうちに救助を求めるのが家族的身内的な人間関係の中にある対称格なのだが、（塚本注・『女子参政廢中樓』の）敏子はそれをも奪われているために、その「独白」は全く行き場を失ってしまうのである。」と述べている。

(21) 小森陽一（17）前掲書

(22) 佐伯順子『「色」と「愛」の比較文化史』（一九九八・一岩波書店）には、こういった流れについての論が展開されており示唆深い。男女が師弟関係にあることも指摘されている。また、「妹と背かゞみ」も取り上げられている。小稿は氏の論とも接点を持つと思うが、「女学生」でも「芸娼妓」でもない「教育のない」「素人」の女性に重心を置いたつもりである。

本稿は、一九九七年二月二〇日広島女子大学において開催された広島近代文学研究会での発表をもとに、加筆修正したものである。

（つかもと あきこ）